

家庭科減災教育プログラム（改訂版）

1 時間目

1. 導入 東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨災害を話題にしながら、前時の授業と本時がつながるようにする。

参考資料

「新学習指導要領との関連」

例1) みなさんが今住んでいる家に、これからもずっと住み続けるとします。その家は、一生安心・安全な場所になるでしょうか？

私たちの街・市に災害が起こるかもしれません。

「住まいを奪われる可能性は絶対はない」といえるでしょうか（資料1）

確認！ 多くの自然災害が発生していて、これからも発生する可能性がある。

「自分の住んでいる地域は安全」「自分は絶対に死なない」とはいえない。

* 福島に聞き取り調査に行った時、仮設住宅の方は「原発は安全」「ここは災害が起こらないと信じていた」とおっしゃっていました。

* 熊本地震でも、震度7の地震が二度起こったことが「想定外」と報道されていました。

* 西日本豪雨災害では「数十年に一度しかないような危険」と報道され、避難勧告が発令されましたが、実際に避難した人は4%に過ぎず、多くの被災者が出ました。

例2) これまで、食と健康について学んできましたが、どんなに健康な人でも突然食べられない事態に陥ることがあります。予測不能な時代の中で、皆さんはどのような時に健康を損なうリスクに直面するでしょうか。

そのような最悪な事態に遭遇してしまった場合を想定し、どのような力をつければよいのかを学習していきましょう。

例3) 世界中でいま、持続可能な社会の実現が目指されています。

これまでの学習では環境負荷の少ない衣食住の生活について考えてきましたが、今日は「すべての人の安心・安全に生活できる社会」という視点から、日本で頻発している自然災害をテーマに考えていきたいと思います。

2. 「防災」視点だけでは生き延びられない

- (1) あなたの家で震災に備えていること

問い 万一の自然災害に備え、家で何か準備していることはありますか。

予想 防災グッズを揃える。家族と連絡を取り合う方法を確認する。
避難場所・避難所を確認する。ハザードマップを確認する。など

* 備蓄状況を知る、というよりも、生徒の意識を自然災害に導くことを目的とします。
ここでは、少し声を拾い上げる程度に留めて下さい。

- (2) 自然災害の発生時間・規模は予測できない

問い いま震度5・6規模の地震が起こった時、あなたの家には誰がいますか？

予想 誰もいない。母親（父親）。祖父母。

想像させて下さい * 気象庁震度階級関連解説表（教員用参考資料）

問い 以下の問いをしてみてください。問いかけだけでOKです。とにかく想像させて下さい。

- あなたの家族は、その時どこにいますか。
- 誰が防災グッズを持って逃げるのでしょうか。
- 避難場所・避難所へみな無事にたどり着けるのでしょうか。
- ハザードマップは絶対的な信頼を寄せられるのでしょうか。

<問いかけの趣旨>

- ・昼間家にいるのは、高齢者と乳児とその保護者。共働き世帯が多い今、家に誰もいない可能性のほ
うが高い（乳児は保育所等に預けられる場合も多い）。
 - どんなに防災グッズを揃えても、グッズの運び手がない可能性もあることを考えてほしい。
 - また、一人でできることには限りがある。
 - ・家族がいつもそばにいるとは限らない。
 - ・大規模災害の影響で、指定された避難場所・避難所へ行けないこともある。
 - ・ハザードマップは、これまでの災害（過去のデータ）をもとに作られている。
- 今後起こりうる災害は、過去の災害レベル以下とは限らない。つまり、あなたが頼りにしているハ
ザードマップは、過去の災害レベル以上のものが発生した場合、役に立たないことも想定してほし
い。

ゼロスタートではなく、一度考える機会があることが大事！

=災害に遭遇してからその後のことを考えるのではなく、事前に最悪の状況を予測しておくことで
瞬時に必要な行動に移せる可能性が高まる。

3. 東日本大震災（避難所）で明らかになったこと **状況を確認する程度**

- ①避難所に行ったけれど入れなかったのは、高齢者、障がいを持つ人（子ども含む）、外国人
足腰の弱さからゆっくり歩いて移動していたら、すでに収容人数を超えており入れなかった。
避難所の環境が障がい者には適さず、他の人から苦情も出て、避難所を出るしかなかった。
土地勘がなく、避難場所を探しているうちにすでに収容人数を超えていて入れなかった。
➡指定外の避難所に集中。
危険を承知で自宅へ戻ったり、車泊する人たちもいた。
- ②避難所生活の長期化
津波に家をさらわれた人は帰れない。原発事故の影響で家に戻れない。
- ③避難所へ防災グッズは持ってきていない
津波から逃れることを優先。福島では排出された放射線量の高さを知らされておらず、すぐに家に
戻れると思って避難した人も多かったという。
- ④避難所の環境悪化(例)
 - トイレの衛生環境
下水道不通・汚物回収遅滞
簡易トイレは和式中心・段差あり・安心して使用できない
 - 食事
形状が合わない（食べられない）・1か月も同じものは食べられない・温かいものがほしい
水分不足
- ⑤関連死の多さ
↓次へ

4. 避難における関連死の実態 **資料 2**

ここでは、実態を知ってもらいます。

「避難所に行けばもう大丈夫」ではなく、ここでの生活をより良くすることが多くの人の命を守る（二次災害を防ぐ）ことにつながります。既存の防災教育だけで命は守れません。「減災」意識が求められます。

5. なぜ人は避難所で命を落とすのか？ **資料 3**

この表を見せる目的も4と同じ。「人が生き延びられるためには、どのような要素・条件（ヒト・モノ・コト）が必要なのでしょうね」と投げかけて下さい。生徒が少しでも考えてくれればと思います（答えは求めないで下さい。感想の記述に表れてくれることを期待します）。

6. 「大人に支援してもらおう」側から「支援する」側へ **(SOS 写真)**

(1) 避難所運営は誰が行うのか

- ① 「避難所運営責任者」の提示
- ② いつでもすぐに行政が駆けつけられるとは限らない

高校生・学生が支援者になる可能性がある

- ・建物の倒壊、土砂災害、地割れ等でライフラインが寸断された（役所の人への移動が困難）。
- ・役所の人でも被災者の可能性が高い。役所から避難所へ向かうことができない。
- ・災害発生時刻が早朝や夜中になると、すぐに市区町村民に対応ができない。

つまり、避難所にいる人が主体的に動かないと、避難所の運営ができない。

(2) あなたが災害時の支援者に（共生・多様性視点をもった生徒・学生へ期待をこめて）

あなたたちは避難所で、被災者（支援を受ける側）に留まらず、支援者になる可能性が大きい。

- ・どのような人が避難所に集まっているのか、目を向けよう。
- ・避難所にどのような工夫が必要かを考えよう。
- ・避難所のユニバーサルデザイン化を図ろう。
- ・避難所にいる仲間（同級生）に、「一緒に動こう」と声をかけよう。

7. 避難所にやってくる「多様な人々」

- * **グループ学習**：グループ数は各学校に任せます。話し合いがスムーズに行えるような配慮が必要になるかもしれません。
- 一人ひとり意見が出せるよう、教員は各グループを回り、ヒントになるような声掛けをしてください。

次のような人を想定し、その人たちが避難所生活でどのような「もの」や「環境整備」が必要になるか、支援策を具体的に考えてみましょう。

(1) 条件：a 「自分と自分の家族」・・・すべてのグループが選択

b 教員が各グループに1 ケース割り当てる

c 各グループで「1 ケース」選択する（他のグループと重なってもよい）

以上、3つのケースに取り組む。

生徒状況によっては、2 ケースでも構いません。

同じケースを多くのグループが選択してしまうと、本研究の「多様なニーズに配慮した避難所設計」にならないため、可能な限りクラス全体で多くのケースを選択できるようご配慮ください。

ケース 青字は支援例

①自分と家族

- ②生後3か月の乳児とともに避難している20代の母親・・・紙オムツ・粉ミルク・授乳スペースが必要。お湯も確保する必要がある。ライフラインが止まっていたら電気ポットは使えない。カセットコンロを使う。石油ストーブを使う。最悪の場合は火を起こす。オムツを交換したら、そのままにはしておけない。臭いが避難所に充満しないためには、ビニール袋やごみ箱の設置（避難所の外）が必要。 *実際の避難所では、体の不自由な人のことを配慮したのか、避難所内に分別ごみ箱を設置していたところもあり、避難所内は悪臭が漂っていたようだ。これは配慮の仕方間違いで、体の不自由な人を動かさず、まわりの人が気づいて外へ捨てに行けば済むことであり、みんなが快適に過ごせるのである。
- ③喘息を持つ3歳児の母親（30代）・・・ゴミや塵などのハウスダストに敏感だということは、事前に説明してください。他の人と生活スペースを別にする必要あり。
- ④中学3年生の受験生と40代の母親・・・受験生は他にもいるかもしれない。受験生が気兼ねなく勉強できるスペースを確保することが必要。
- ⑤小麦と卵アレルギーがある30代の男性・・・乾パンは食べられない。配給される食事の内容をしっかりと確認し、場合によってはアレルギー対応食品を提供する必要がある。アレルギー物質を使用しない食糧備蓄が必要。
- ⑥聴覚障害（まったく聞こえない）がある40代の女性・・・館内放送が聞こえないため、情報ボードを作り、視覚的に情報を伝える方法を考える必要がある。
- ⑦視覚障害（ほとんど見えない）がある50代の男性・・・館内放送など音声による情報はキャッチできるが、生活するうえでは介助が必要になる。生活スペースは壁側に設定する（点字ブロック等がないため、壁伝いに移動できるような配慮が必要）。
- ⑧日本語・英語が話せない・読み書きできない40代の外国人男性・・・筆談ができないため、色々なイラストやジェスチャーで情報を伝える必要がある。具体的に考えさせるとなお良い。
高校生にピクトグラム（絵表示）を考えてもらえると嬉しいです。
- ⑨車いす生活のため、近所の人と避難所に来た80代の女性・・・車いすの人は避難所の奥の方に生活スペースを設定されてしまうと、食事・物資配布の際や外へ出る時に非常に移動が困難になるため、出入口に近いところに生活スペースを設定する必要がある。避難所に段差があれば、介助者も必要。紙オムツが必要かもしれない。その処理への配慮は②に同じ。
- ⑩性的マイノリティ（LGBT）の人・・・性別で分けない「誰でもトイレ・更衣室等」が必要である（女性や障害者、介助が必要な高齢者にも必要な配慮にもなる）。避難所では家族（主に異性の集合体）を単位に区分けされがちで、同性パートナーと居づらい。家族以外のグループが生活できるスペースが必要である。男女で支給物品を分けるのではなく、必要な人が必要な支給物品を、プライバシーを守って受け取れるような配慮が必要（化粧品、月経用品など）。性的マイノリティに対するハラメントが起きる可能性があるため、避難所運営者にLGBTに対する理解が必要である。カウンセラーがほしい。

【 どうしても思い浮かばない時の情報提供 】

各グループを回りながら、次のような声掛けをしてください。

- ①段ボールパーテーションはどのように配置する？
- ②多様な人を配慮したスペースにするには？各家庭のスペース以外にどのようなスペースが必要？
- ③食事・物資配布はどこでする？

④少しでも安心・快適なトイレにするには？

断水・汚物回収遅滞を前提で考えさせてください。

⑤レジャーシートでは冷たい。床に敷けるものとして何を行政に依頼したい？

⑥どのような情報ボードがあるとよい？ どこにあると安心？

⑦ごみ箱はどこにあると良い？

⑧喫煙場所はある？ いない？ いるとしたら、どこに設置する？

⑨ペットがいる人はどうする？

⑩支援物資はどこに、どのように置いておく？ **東日本大震災の場合、山積みになってほとんど捨てられたそうです。熊本地震では、雨に濡れてしまったところもあると報道されていました。**

高校生がどのようなアイデアを出すのかは分かりませんが、上記だけが正解ではありません。

グループ学習のねらいは、多様な人の生活をみんなで考えることにあり、実際に生徒が避難所に行くような事態になった時、この取り組みを思い出して何らかの行動を起こしてくれれば、という願いがあります。

(2) グループで支援策を出し合おう

(3) 話し合ったら、避難所作りに取りかかる。

声かけ「あなたの学校の体育館は指定避難所です」（という設定で行う）。

選択したケースの人たち（それ以外のケースを考えてくれてもよい）がより安心して避難所で過ごすことができるような避難所をデザインしてください。

以下、2時間目に続きます。

2 時間目

8. 安心・安全な避難所をデザイン（設計）してみよう（グループ学習）

準備するもの

模造紙、ライティングシートなど

声かけ

「あなたの学校の体育館は指定避難所です」（という設定で行う）。

3つのケースの人たち（それ以外の人を考えてくれてもよい）がより安心して避難所で過ごすことができるような避難所見取り図を作ってください。

- (1) 避難所にいるあなたと仲間で、避難所を設営します！「支援者の立場で考えること」を強調！
具体的には、体育館の大まかな見取り図を描き、具体的なアイデアを模造紙に描き込んでいく（体育館の外も含めて考える）。
教員が事前に体育館の見取り図（縮図）を示しておくこと、スムーズに取り組める。
書画カメラがあれば、それを使用してもよい。

設計の際の条件 提示すること

- ・校舎、部室は使えない。
- ・体育館のなかの施設（体育教官室・トレーニング室など）や、グラウンドは使える。
- ・地域住民 400 人くらいが体育館に集まってきている。

- (2) クラス発表
各グループの避難所見取り図を発表する。

声かけ

「発表の際、どこに配慮したのかを必ず入れて下さい」

- (3) 感想・考察の記入
まとめのところで再度、生徒へ投げかけてください。

声かけ

「人が生き延びられるには、どのような要素・条件が必要なのでしょうね」

評価について

基本的には各学校の判断にお任せしたいと思います。

理由は、本授業のねらいが「避難所をデザインできる生徒の育成」にあるのではなく、多様なニーズをもつ人々の生活を想像し、それらの人にどのような配慮ができるかを考えられる生徒の育成にあるからです。

生徒一人ひとりが配慮点を考えるだけでなく、クラス全体での発表を通して、自分が気づけなかったことをクラスメートから学ぶことができれば、それでOKと考えています。

発展授業

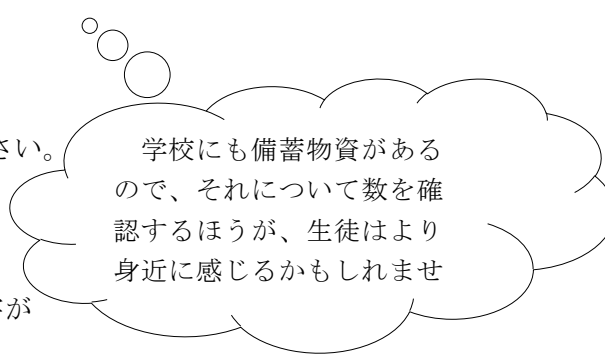
9. あなたの街（学校所在地）の備蓄チェックをしてみよう（グループ学習）

いま、大規模災害が起こったら・・・

■学校所在地に合わせて資料を変えます。

市あるいは都道府県のHP「備蓄物資」で検索してみてください。
現在の備蓄量と保管場所などを見つけることができます。

具体的には、以下のような資料を各グループに配布し、
市の「人口」と「備蓄量」を比較して、市全体に大きな被害が
あった場合、備蓄量で安心できるかどうかを考えさせます。



学校にも備蓄物資があるので、それについて数を確認するほうが、生徒はより身近に感じるかもしれません

例) 災害対策用物資の備蓄状況
生活必需物資等の備蓄状況
緊急物資の備蓄マニュアル

罹災者数と避難者数を分けて備蓄物資数を算出しているところがあるようですが、想定される避難者（避難所に来るであろう人数）だけに備蓄物資を配布する、という考え方は見直されています。

つまり、在宅避難者（やむを得ず家に留まっている高齢者、病人、障がい者など）やその他の場所（指定避難所以外の場所、車中）に避難している人にも、物資を配布する必要があると考えられるようになってきました。

この学習のゴール

調べて気になったことを、行政に問い合わせてみる。

参考・引用文献

1. 中国新聞「『想定外』対応に課題」（2016. 4. 16）
2. ダイバーシティ研究所 「性的マイノリティ」避難所運営のための参考リソース
http://blog.canpan.info/d_hinansho/archive/8 （2016. 3. 21 アクセス）
3. 復興庁「東日本大震災における震災関連死に関する原因等（基礎的数値）について（2012. 8. 21）」
4. 復興庁「東日本大震災における震災関連死の死者数（都道府県別）（2015. 3. 31 現在）」
5. 気象庁HP <http://www.jma.go.jp/jp/quake/>（2016. 4. 28 アクセス）
6. （公財）とちぎ男女共同参画財団『男女共同参画の視点で取り組む防災ハンドブック』（2015. 11）
7. 内閣府「避難所における良好な生活環境の確保に向けた取組指針（2013. 8）」
8. NHK 週刊ニュース深読み「震災5年“命を守る”防災はどこまで進んだ？（2016. 3. 5 放送）」
9. 日本財団 被災者支援拠点運営人材育成委員会「避難所から被災者支援拠点へ一次の災害に備える研修プログラム」（2015. 10. 19～20 および 11. 16～17 開催）
10. 日本財団 被災者支援拠点運営人材育成委員会ハンドブック『避難所から被災者支援拠点へ多様なニーズに応える・備えるために』（2014. 3）
11. つなプロ報告書編集委員会『つないで支える。災害への新たな取り組み』亜紀書房（東京）

授業見学およびインタビュー

1. 福島県立福島商業高等学校 鈴木裕子先生の授業およびインタビュー
2. 福島市川俣町農村広場仮設住宅 川俣町山木屋からの避難者へのインタビュー
3. 香川県私立英明高等学校 植田幸子先生へのインタビュー